

SGPAM 特別例会 2023 に向けて

～なぜ再びムクナ豆か～

SGPAM 顧問 湯浅 龍彦

本 SGPAM は、東西医療を結ぶ会です。第7回定例会でムクナ豆を取り上げたのは、記憶に新しいことと思います。そこでは、三浦左千夫先生によるムクナ豆の由来と食べ方、ムクナ会々員である瀬川病患者さんの発言、ムクナ豆を自ら栽培されるパーキンソン病患者さんの体験記、そして、西川典子先生からパーキンソン病の病態とムクナ食によるドーパミンの動態など実に盛りだくさんのお話がありました。その後、自らもムクナ豆を食し、ムクナ豆の多面的能力 multipotentiality に魅了されているのです。

ここにムクナ豆第2弾を企画した理由は、ムクナ豆が有す多面的な能力の由来を探り、日々の健康増進、未病と予防に於けるムクナ豆の可能性と立ち位置を論議し、理解を深めたいとの願いからです。

現代医学は、極めて細部に亘り深化し、西洋医学の最前線は、分子であり、今や量子まで達しています。生体には様々なネットワークが張り巡らされていて、血管、リンパ管、経絡、神経系と免疫系があります。そうした中で、本 SGPAM がカバーする分野は、鍼灸・あん摩マッサージ指圧（主に経絡）、漢方（気血水）、そして、現代医学（経絡以外）であります。東洋医学的基盤に成り立つ鍼灸・あん摩マッサージ指圧と漢方、そして、構造と機能分子に

基づく現代西洋医学の間には、大きな隔たりがあることは否めません。

つまり、SGPAM が東西の医療を結ぶという理念を掲げる会であるということは、畢竟、神経系と免疫系への造詣を深めるということ以外に他はないのです。東西が接近できる領域（フロンティア）は、神経系と免疫系にあり、鍼灸・あん摩マッサージ指圧はその隔たりを埋める力を有しているのです。

今や SGPAM 会員は、鍼灸が脳のネットワークや免疫を整えることを理解しています（三村直巳先生の、お灸と免疫の講演）。そこで、今回取り上げるムクナ豆ですが、神経系や免疫を整える力に注目が集まり、将来は鍼灸・あん摩マッサージ指圧との補完などを通して、SGPAM が目指す東西両医療を結ぶ懸け橋としての役割が期待されるのです。

令和5年7月23日